

（近刊著書紹介）中島平三編『ことばのおもしろ事典』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 千佳子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/537

(近刊著書紹介)

『ことばのおもしろ事典』

(中島平三 [編]、朝倉書店、2016 年 4 月 5 日刊)

櫻井 千佳子

「世界一長い文は?」、「日本語と英語はどちらがより自由か?」、「われわれ人類はいつことばを持ったのだろうか?」。このような疑問をもったことはないだろうか。我々は、毎日ことばに囲まれて、ことばを使って生活をしている。我々は、ことばを自由に駆使して友達と語り合ったり、勉強をしたり、歌ったり、または議論をしたりしている。その意味では、ことばを使う全ての主体がことばの専門家である。しかし、本書で編者が述べているように、「動物界の中でもことばを使うのは人間だけであることに気付いたり、脳の病気や怪我によってことばが自由に使えない人の様子に接したり、ことばで恋を語ったり人を喜ばせたり悲しませたりするような経験をすると、ことばが使えるって結構不思議なことであり、大変なことなんだ、と思える」ことがある。

本書は、身近にあることばのおもしろさや不思議さから、多彩で深い言語学の世界へ誘おうとするものである。本稿の冒頭の 3 つの疑問を含む 30 の疑問を出発点にして、言語学の多様な分野の 24 人の研究者が、わかりやすく学術的な説明を行っている。本書は、言語学、英語学や日本語学を専攻している大学生はもとより、言語教育に携わる仕事をしている人、コミュニケーション学や文化研究を行っている人、さらには、そのような「ことば」のおもしろさや不思議さを楽しんでみたい人にも読んでいただき、ことばの世界にさらに興味を持っていただけるようにという企画のもとに編纂された「おもしろ事典」である。

本書は 3 部構成である。3 部はそれぞれ約 10 の章から成り立っており、各章には、ことばのおもしろさや不思議さを問うような親しみやすい題名が付けられている。また、副題として言語学の専門領域の名称が示されている。各章では、脇注で専門用語や参考事項がわかりやすく説明されており、章末には「まとめ」のセクションが設けられていて要点を確認することができる。さらに、「練習問題」として確認や発展のための課題も用意されている。また、参考文献として、その分野の必読書が挙げられている。

第 I 部「ことばを身近に感じる」では、身近な日常生活の中にあることばのおもしろさや不思議さについてのトピックが取り扱われている。例えば、「バイリンガルの頭の中はどうなっているの?」【バイリンガル／バイリンガリズム】(平川真紀子)では、人間には 2 つ以上の言語を習得する能力が備わっていること、バランスのとれたバイリンガル話者になるための様々な条件、そしてバイリンガルであることでの認知的利点についてが紹介されている。第 II 部「ことばの基礎を知る」では、ことばについての専門的な基礎知識を提供しながら、ことばの基礎にあるおもしろさや不思議さに関する話題を論じている。例えば、「アンガールズは un-English か?」【形態論／派生】(中島平三)では、語が形態素に分けられること、

形態素のうちの接辞（アンガールズの例では「アン」）はそれが付着する語基の種類を選ぶこと、母語話者は形態素の結合に関する決まりを脳の中に持っていることが論じられている。そして、第Ⅲ部「ことばの広がりを探る」では、より広い世界でのことばについてのおもしろさや不思議さを紹介している。例えば、「近い言語、遠い言語」【言語距離】（井上優）では、「よく似た言語」かどうかは主に文法・語彙の類似度が関係するが、表面的な類似や相違にとどまらず、その類似や相違をもたらす要因を考える必要性があるということについて、様々な言語からの例を挙げて説明されている。

本書の中で、紹介者である櫻井千佳子は「英語に敬語はあるのか？」と題し、社会言語学の分野におけるポライトネス理論を説明している。日本語の敬語を出発点として、敬語のような形式的な言語表現から、配慮に基づいた表現までを含む、円滑なコミュニケーションのための言語行動としてのポライトネスについて取り扱っている。そして、ポライトネスには、どの言語にも共通する一定の決まりがあるという普遍的な側面と、それがどのように表されるのかという意味で言語や社会、文化によって異なるという個別的な側面の両方があることを論じている。また、ポライトネスを身近な世界から読み解くために、「私って～じゃないですか」などの若者言葉や、「以上でよろしかったでしょうか」などの接客の場面におけるマニュアル敬語などを手がかりとして紹介している。これらの表現について、形式上は丁寧であるのにもかかわらず失礼な感じを与えることもある理由を、「面子」や「ポジティブ／ネガティブポライトネス」などの概念や、語用論の「文脈」などの概念を使って説明している。

近年、グローバル化に対応した英語教育の在り方が模索されている。ことばを身に付けるというのは簡単なことではない。特に外国語の習得においては、様々な困難がある。我々は、母語については、乳児のころからそのことばの世界に身を置き、多くの言語入力を経験し、そうして得た言語知識を実際に様々な場面で使ってみることで、ことばが通じた経験、または、通じなかった経験を繰り返しながら、さらには学校教育でもことばについて学びながら、読み、書き、聴き、話し、長い期間をかけて、自然にその言語の流暢な使用者になっていく。そのプロセスで、ことばに見られる様々なおもしろさや不思議さの奥には、ことばの本質となる規則性や普遍性があり、それを言語の主体である我々人間が自由に使うことを学んでいくのである。このような母語の獲得のメカニズムを理解し、それを外国語である英語の習得に還元していくことは、英語を「使える」ようになるために非常に重要なことであると言えよう。

本書は、ことばへの気づきを手がかりに言語学の扉を開け、ことばの理解を深めるだけではなく、どのように言語コミュニケーションを実践をしていくのか、ということまでも含めて、読者をことばの世界に誘うものである。多様化する現代社会で、「ことば」がコミュニケーションの主要な要素になっていることを考えあわせるに、本書は多言語、多文化の社会に生きていくことになる我々に新しい視座を提供し、共生を可能にする示唆を与えるものである。